

児童館での手作り楽器制作と演奏活動の企画実践における保育者養成課程学生の学び（1） —学生の実践の振り返りをもとに—

A Study on the Early Childcare Students' Learning by Planning and Practicing the Activity of Making Musical Instruments and Playing them in a Children's Recreation Center (1)
-Focusing on Students' Reflections on their Practice-

山 本 敦 子
Atsuko Yamamoto

（要約）

本稿では、平成27年度に実施した保育者養成課程学生対象の授業実践「児童館における子どもや親子を対象とした手作り楽器制作と演奏活動の企画実践」の取り組みについて、学生の学びや授業の成果を把握するための質問紙調査から、学生の実践の振り返りをもとに結果考察を行った。興味付け、制作援助、演奏活動進行の各場面のうち、特に制作援助の場面では、「(作り方の)理解を促す」「発達に応じた作業をさせる」「意欲・自信・達成感を持たせる」ことを意図した対応がなされ、学生は子どもの心情や育ちを読み取り、知識や技能に配慮しながら共感的な態度で個に応じた援助が行えるように努めていたことがわかった。このことは保育を実践する際に必要な行動的側面の力量にも通ずる部分があり、本授業実践の意義の一つとして見通しを得ることができた。

（キーワード）

手作り楽器、制作・演奏活動、児童館での企画実践、学生の学び

1. 課題の所在と本研究の目的

手作り楽器とは、自然物や人工の材料、家庭の廃材などを利用して、音が鳴るように自ら考えて作る楽器のことである。子どもたちの身の回りにある材料でも簡単に作れることから、保育や幼児教育の現場で取り入れているところも多い。保育者養成校においても同様に、音楽や造形、保育内容「表現」等の各授業の中で、学生の資質や能力の向上、教育要領や保育指針への対応を図ることなどを目的として様々な方法で実践されている。前研究（山本2016）ではそれらの先行研究に焦点を当て、手作り楽器の授業実践が保育者養成の学生にどのような学びをもたらすのか、また授業に取り入れる意義などについて考察を行った。結果、先行研究での授業実践においては、①音楽体験に関する学び（音の質、音色、楽器の奏法と構造、音楽への希求と探求心などの新しい認識や態度）、②創作体験に関する学び（表現の幅、創造性、意欲、達成感、イメージ、発想、個性など、創造過程において立ち現れる人間の様々な能力や精神面への気づき）③自己や他者への気づき（自分を見つめること、自己開発、仲間とのコミュニケーション、助け合い、思いやり、共有すること、リーダーシップなど、他者との関わりの中でこそ培われる能力）、④保育・教育実践としての学び（音や楽器に親しむ音楽的な体験、友達との協同的な体験、自由な発想による創造的な体験など、保育・教育実践上子どもたちの育ちに意義があることの理解）をもたらすものとして、手作り楽器による授業実践は一定の成果を得ていることがわかった。

前研究での考察を受けて、筆者は平成27年度に、保育者養成課程の学生を対象とした演習科目「ゼ

ミナールⅡ」において、学生たちに手作り楽器の制作と保育の観点からの分析に取り組ませ、この学内での学習体験を、地域の児童館で子どもや親子を対象とした楽器制作と合奏活動を企画、実践させる活動へと発展させた。この一連の取り組みに関して、実践後、学生の学びや授業の成果を把握するために記述または質問紙調査を通して学生に振り返らせた。質問紙調査は、「自身の実践の振り返り」「手作り楽器の再検証」「幼児教育・保育・子育て支援への展開」についての3つの内容で構成されている。これらの回答記述結果のうち、本論では「自身の実践の振り返り」に焦点を当てて分析を行い、保育者養成課程における本授業実践の意義と課題について考察を行うこととする。なお、調査実施と結果考察に際しては、関係者に研究趣旨の説明と研究への協力依頼、個人情報保護の倫理的配慮を行った。

2. 授業概要

A短期大学の保育者養成課程では、卒業必修科目として1・2年次ともにゼミナールを設置している。平成27年度2年次のゼミナールⅡでは自らの関心に応じた保育の専門性を養うことを主なテーマとし、筆者担当のゼミナールでは2年生17名を対象に、「音楽」「表現」という側面から保育や幼児教育への知識・関心を深め、「感性豊かな保育、保育者」について課題研究を行うこと、またゼミ生との共同ワークや地域の方々との交流を通して「自分気づき」「自分づくり」を行うことを概要とした。手作り楽器に関する授業実践は表1のとおり、前期に5回、後期に9回行い、各回での学びが後期第12回目の児童館での実践につながるように計画した。前期第9回目の授業では、手作り楽器の作り方や材料の可能性について実際に先輩学生が制作した手作り楽器に触れながら探求し、「たたく」「振る」「はじく」「こする」「吹く」の5つの奏法に分類したり、既成の楽器と比較したりして、手作り楽器の特徴を多角的につかませることとした。その直後の授業において、本来ならば学生の創意工夫による自由な手作り楽器を制作する活動を設けるのが学習上望ましかったが、時間の都合により、今回は前期第10~12回の授業で風船太鼓、ウォータースティック、プラカップ太鼓の3種を共通課題として制作・分析に取り組ませた。

表1 ゼミナールⅡ（A前期・B後期）における手作り楽器に関する授業実践の内容

期	授業回	年月日	テーマ	内容
ゼミナールⅡ A (前期)	第6回	平成27年5月19日	糸電話を作つて話そう	糸電話の制作実演、最も効果的な材料や方法を検討。
	第9回	平成27年6月23日	手作り楽器とは	手作り楽器の作り方や材料の可能性について探求。
	第10回	平成27年6月30日	共通課題（風船太鼓）	「たたく」楽器の試作と保育実践の観点からの分析。
	第11回	平成27年7月7日	共通課題（ウォータースティック）	「傾ける」楽器の試作と保育実践の観点からの分析。
	第12回	平成27年7月14日	共通課題（プラカップ太鼓）	有音程楽器の試作と保育実践の観点からの分析。
ゼミナールⅡ B (後期)	第2回	平成27年10月7日	卒業課題（学外実践）提示	3つのグループ・リーダー・制作楽器を決める。
	第3回	平成27年10月14日	企画・企画書作成	各グループに分かれ実践企画を考案し、記録する。
	第4回	平成27年10月21日	企画・企画書作成	各グループに分かれ実践企画を考案し、記録する。
	第5回	平成27年10月28日	材料準備、企画内容発表	各グループで材料を準備し、企画内容を発表する。
	第6回	平成27年11月18日	模擬実践と内容調整	制作・音遊び・合奏活動を模擬実践し、調整を図る。
	第7回	平成27年11月25日	模擬実践と内容調整	制作・音遊び・合奏活動を模擬実践し、調整を図る。
	第11回	平成28年1月13日	実践に向けて最終確認	音遊び・合奏活動の最終調整と材料搬の確認。
	第12回	平成28年1月17日	県内大型児童館での実践	13:00~15:00の2時間、親子を対象に実践。
	第13回	平成28年1月20日	実践の振り返りと課題	実践場面の録画、質問紙調査による実践の振り返り

3. 児童館での手作り楽器制作と合奏活動の企画の考案

後期に入り、計7回の授業において学外実践に向けての企画考案と模擬実践による内容調整を行った。制作する楽器は前期に共通課題として取り上げた風船太鼓、ウォータースティック、プラカップ太鼓の3種である。学生たちが3つの楽器グループごとに考案した企画書をまとめたものが表2である。「手づくり楽器をつくろう＆みんなでアンサンブル」とのタイトルのもと、前半の1時間15分を制作時間として「興味づけ」「作り方の説明」「制作」の各段階に分けて作業内容や援助方法を検討した。休憩15分をはさんだ後半30分は「制作楽器による音遊びと歌に合わせた合奏の活動」を一斉に行えるよう企画した。実践先である児童館では、日ごろから子どもや親子を対象とした様々なイベントが行われており、制作活動も月に一度行われて定着している。本企画の実践日はちょうどその制作活動の日に当たつており、事前からある程度の人数の参加者が見込まれたため、参加者全員が可能な限り3種類の楽器を作れるように各グループ50セットずつ材料を用意しておくこととした。

表2 親子を対象とした手作り楽器制作と合奏活動の企画書

楽器	風船太鼓	プラカップ太鼓	ウォータースティック
制作例			
担当学生数	6名	6名	5名
準備物	①直径20cmの円筒型缶50個 (切り口はガムテープを貼る) ②缶の側面を巻く色画用紙 (形に合うように切っておく) ③色ガムテープ ④マスキングテープやシール ⑤マジック ⑥はさみ ⑦中に入れる米など	①【本体】プラスチックカップ50個 ②【本体】マスキングテープ ③【マレット】割り箸 ④【マレット】マスキングテープ ⑤【マレット】ウッドビーズ50個 ⑥【マレット】綿 ⑦【マレット】ボンド ⑧【マレット】はさみ	①空き缶100個 (洗って乾かしておく) ②瞬間接着剤 ③ガムテープ ④包むための不織布50名分 ⑤模様のための不織布 ⑥カラー輪ゴム
興味づけ 13:00～(5分)	・制作する楽器を見せる ・「これはなんという楽器かな?」「どんな音がするかな?」 ・実物の太鼓とマラカスの紹介	・制作する楽器を見せる ・素材や奏法を考えさせる ・学生が模範演奏をする ♪きらきら星 ♪かえるのうた ・音の鳴る仕組みを説明する	・制作する楽器を見せ、音を聞かせる ・大きさの異なるもので聞き比べ ・材料に興味を持たせる ・似たような楽器の紹介(レインスティック、オーシャンドラム)
説明 13:05～(5分)	・材料、作り方の説明 ・缶の扱いを注意させる ・缶の底や側面を叩いたり、耳を近づけて音を聞いたりする	・太鼓、マレットの2種類を制作 ・マレット製作では目を突いたりしないように注意を伝える	・包んでいる布を取り、素材や音の鳴る仕組みを教える ・作り方の説明 ・缶の取り扱い、接着剤の注意
制作 13:10～(65分)	・用紙に描く、シールを貼る ・お米を入れる ・風船を伸ばす／切る／張る →風船を貼るのが難しい子どもを手伝う ・用紙を巻く ・テープなどで最後の仕上げ	先にマラカスから制作し、ボンド乾燥中に本体を制作する 【マレット】 ・割り箸をマスキングテープで巻いたり、ペンで模様を描いたりする ・割り箸の先に綿を巻き、ボンドをつけ、ビーズの穴にねじ込む 【本体】 ・マスキングテープを巻く。シールを貼る	・缶を一人2つずつ配る ・片方の缶に水を2/3ほど入れる ・飲み口が合うようにもう一つの缶を水の入った缶の上に置く ・瞬間接着剤で2缶を付ける →保護者・学生が手伝い子どもは缶をかぶせる ・15分ほど時間を置いた後、ガムテープでさらに固定する ・不織布を巻き、輪ゴムで両端をしばる ・不織布の模様をボンドでつける
休憩・準備 14:15～(15分)	・机、道具を片付ける ・歌詞カード準備(ホワイトボード) ・ピアノ準備		
音遊び・合奏 14:30～(10分×3 樂器)	・たたく(膜面、底面) ・つまんで放す ・振る(上下、左右、膜面を底) ・膜に口を近づけて声を出す ♪大きなたいこ ♪アイアイ	・打つ ・リズムをまねっこ ・音程の作り方を伝える(ド～ソの練習) ♪きらきら星 ♪かえるのうた (全員orグループで音程を担当) ・リクエスト曲を皆で演奏する	・「どんな音がするか」子どもたちに問いかける、音の鳴り方や感じ方に違いがあることに気付かせる ・だがが一番早く鳴り止むか、最後まで鳴らすことができるか、聞き比べる ♪あめふりくまのこ ♪しゃぼんだま
終了 15:00～	(当日決定) 最後に全員合奏 「おもちゃのチャチャチャ」に合わせて自由に音を鳴らして楽しむ		
	片づけ		

4. 活動実践における学生の学び—自身の実践の振り返りをもとに—

実践後第13回目の授業において、当日の録画を見ながら、教員作成の質問紙を通して学生たちに「自身の実践の振り返り」「手作り楽器の再検証」「幼児教育・保育・子育て支援への展開」の3内容について考察させた。本稿では「自身の実践の振り返り」についての回答記述結果を分析する。活動の進行順に沿い、次の（1）～（3）の質問項目を「とてもできた」から「できなかった」までの4件法で自己評価させ、その理由や状況を自由に記述させる方法をとった。

（1）手作り楽器に対する参加者への興味付けは効果的にできたか

今回の活動における導入や興味付けは保育での活動展開と同様、子どもたちが主体的、意欲的に活動に参加できるようにするために重要となる。この質問に対する評価は図1に示すように、全体では肯定的評価（とてもできた・できた）が14名（82%）、否定的評価（あまりできなかった）が3名（18%）であり、参加者への活動への興味付けは概ね効果的にできたことがわかる。

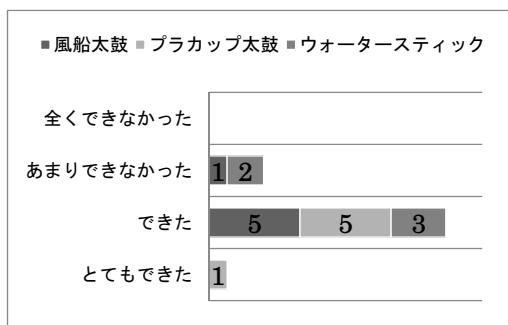


図1 興味付けの自己評価の回答（回答人数）(n=17)

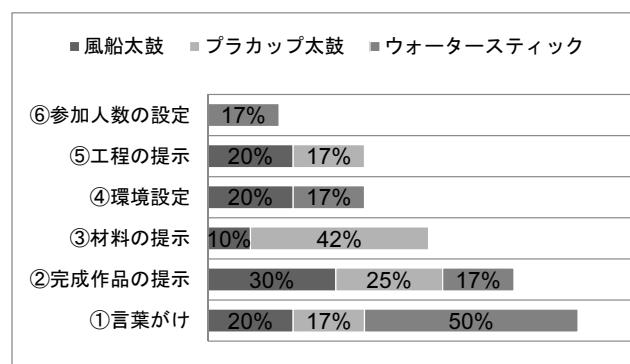


図2 参加者への興味付けに効果的な方法（回答比率）(n=28)

両評価の理由や状況に関する記述を読み取り、趣旨をキーワードごとに分類すると、図2のとおり、参加者への興味づけに効果的な方法として6の対応例を確認することができた。表3（1～3）は対応方法ごとに抽出された意図と記述例（反省事項も含む）を示したものである。全体を通して割合が最も高かったのは「①言葉掛け」による興味づけであった。当日は親子で来ている方が多く、年齢層は幼児や小学校低学年の子どもたちが多く参加していた。3種類の楽器を各コーナーで制作できることを伝えて活動を開始したが、どのコーナーに参加しようか迷っている子どもも多かった。そのような状況の中で学生は子どもたちに「活動の楽しさを感じさせる（音・楽器・奏法への興味を促す）（発音・本体・装飾の材料への興味を促す）（手作りする楽しさを示す）」「安心感して活動に参加させる」ことを意図した言葉掛けを行うことにより、活動参加へ興味を持たせようとしたことがわかる。次いで「②完成作品の提示」では、「完成作品を展示しておく」「実際に見せる」「実際に鳴らす」「鳴らし方を見せる」ことにより、音・楽器への興味を促し、完成へのイメージや目標を具体的に持たせようとしたことがわかる。「③材料の提示」では、風船太鼓の場合は普段なかなか手に入らないような大きめの風船、プラカップ太鼓の場合は家庭でもよく飲まれている乳酸菌飲料のカップや色鮮やかなマスキングテープを使用したが、これら発音・本体・装飾の材料を事前に見せることで子どもたちに活動の楽しさを感じさせ、興味や意欲を促すことができたとしている。ウォータースティックの場合は空き缶を伝う水の音が魅力的

な楽器であるが、外側を布で覆うため、本体材料や内部構造がなかなか想像しにくい。本体が空き缶できていることをもとに興味付けすることもできたであろうが、今回はそれには触れられていない。後述するように、ウォータースティック制作は工程に大人の援助が必要な箇所がいくつかあった。そのため「④環境設定」では親子でも作業できるスペースの確保が課題に挙がっており、また「⑥参加人数の設定」に関しても、活動開始時に来場者が集中したことへの対応に追われたことから、興味づける間もなく作業に突入してしまったことへの反省がうかがえる。一方、風船太鼓の場合は予め4つの工程別に作業スペースを設置していたことにより各作業に参加しやすい環境を提示できたことから、見本作品の展示の仕方も興味喚起のための環境構成の一つに挙げている。また「⑤工程の提示」でも、風船太鼓は「自分で絵を描く」「好きなシールを貼る」、プラカップ太鼓は「好きな模様のテープを貼る」などの工程があったが、完成までの工程に「自主性が発揮できる」部分が含まれていることを事前に伝えることで活動参加への興味を持たせられたとしている。

表3-1 風船太鼓作りにおける参加者への興味づけに効果的な方法と意図

対応例	意図	記述例
①言葉がけ	活動の楽しさを感じさせる（音・楽器への興味を促す）	子どもたちが楽器に興味を持っている姿を見て、実際に見本の風船太鼓を自分が持ち、音を鳴らしながら「こんなふうにするんだよ」と言葉がけをし、それに対し子どもも鳴らし方も真似するようになり、さらに興味を持ち取り組むような姿が見られた。
②完成品の提示・音を聞かせる	活動の楽しさを感じさせる（音・奏法への興味を促す）	風船を引っ張って音を鳴らしたり、米や小豆などを中に入れて振って音を出すことを伝えると、とても興味を持った様子だった
③材料の提示	活動の楽しさを感じさせる（発音材料への興味を促す）	参加者に作例を見せるときに、風船が張ってあることを強調して見せたら、難しそうだけ面白そうという反応に見えた。
④環境設定	意欲・目標を持たせる 安心して活動に参加させる	環境設定の際、完成作品をわかりやすく並べておき、イラストを描く場所やお米を入れる場所を作り、参加しやすいようにした。
	目標を持たせる	私たちの風船太鼓を置く場所も、もう少し高いところだったら良かったと思った。
⑤工程の提示	活動の楽しさを感じさせる（装飾材料への興味を促す） 自主性を発揮させる（手作りする楽しさを示す）	子どもたちに絵を描いてもらったり、シールで好きなように装飾できる自由性があることで、子どもたちの興味が高まった。

表3-2 プラカップ太鼓作りにおける参加者への興味づけに効果的な方法と意図

対応例	意図	記述例
①言葉がけ	安心して活動に参加させる	作りたいけどなかなか勇気が出ない子に対し「一緒に作ろう」と笑顔で声掛けし、一緒に作れた。
②完成品の提示・音を聞かせる	活動の楽しさを感じさせる（音・奏法への興味を促す） 意欲・目標を持たせる	完成した見本を展示しておくことでどんなものを作るのかや、どのように出来上がるのかを見ることができ、子どもたちの「作ってみたい」という気持ちを引き出せたと思う。また近くにいる子どもたちに「この楽器はこうやって叩くんだよ」と見せることでプラカップ太鼓への興味を持たせることができたと思う。
③材料の提示	活動の楽しさを感じさせる（本体材料への興味を促す）	ヤクルトで作られていることを最初に伝えるようにしたら「ヤクルト飲んだことあるー」と親近感を持ってくれた。家にもあるもので簡単にできるということを保護者の方にわかつてもらうことで、家でもヤクルト飲んだらやってみようかなという気持ちになってもらえたと思う。
	活動の楽しさを感じさせる（装飾材料への興味を促す）	プラカップ太鼓を選んで周りに座って待っている子どもたちに、いろいろな種類のマスキングテープを紹介して、好きな色や柄のマスキングテープを選んでもらうことで、作るまでに楽しみな気持ちが増えるように声掛けを行った。
⑤工程の提示	自主性を発揮させる（手作りする楽しさを示す）	身近な物であるヤクルトにマスキングテープでかわいくすることで、子どもたちや保護者の方から「かわいい」や「作りたい」という言葉をもらった。

表3-3 ウォータースティック作りにおける参加者への興味づけに効果的な方法と意図

対応例	意図	記述例
①言葉がけ	活動の楽しさを感じさせる（音・楽器への興味を促す）	「どんな音がするかな？」と子どもたちが音に興味を持つような言葉がけができた。そうするとはじめはあまり集まってこなかったのが、作ってみたいと言つて寄つてくれる子が増えてうれしく思った。
	活動の楽しさを感じさせる（手作りする楽しさを示す） 安心して活動に参加させる	楽器を作る際にできるところはなるべく進んでもるように声かけをして、作ることも楽しめるように工夫した。できたら必ず褒め、できないところは援助しながら言葉がけするなどした。
②完成品の提示・音を聞かせる	活動の楽しさを感じさせる（音・楽器への興味を促す）	【反省】最初に前で説明をしたが音が小さいため音が聞こえなかった人もいたと思う。何人かの子どもの耳元で音を聞いてもらったが、微妙な表情であったので興味付けとしては弱かったと感じた。

④環境設定	自主性を発揮させる (手作りする楽しさを示す)	【反省】作る場所が狭く、親子でしっかり楽しめているかと言われると、親がほぼ作てしまっているところが見られた。
⑥参加人数の設定	活動の楽しさを感じさせる (音・楽器への興味を促す)	【反省】指導者に対し参加人数が多く、完成というゴールにただ素早くたどり着くように促してしまったため、楽器に対する興味が持てるよう様な声かけは少なくなった。

(2) 手作り楽器を制作する場面で参加者への援助は効果的にできたか

この質問に対する評価は図3に示すように、全体では肯定的評価（とてもできた・できた）が14名（82%）、否定的評価（あまりできなかった）が3名（18%）であり、手作り楽器を制作する場面で参加者への援助は概ね効果的にできたことがわかる。

両評価の理由や状況に関する記述を読み取り、趣旨をキーワードごとに分類すると、図4のとおり各楽器の制作過程での援助における効果的な方法として11の対応例を確認することができた。表4（1～3）は対応方法ごとに抽出された意図と記述例（反省事項も含む）を示したものである。

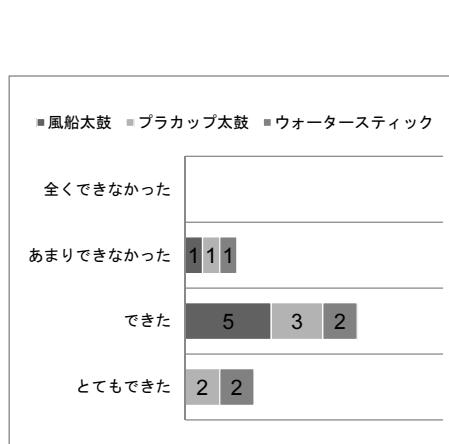


図3 指導の自己評価の回答
(回答人数) (n=17)

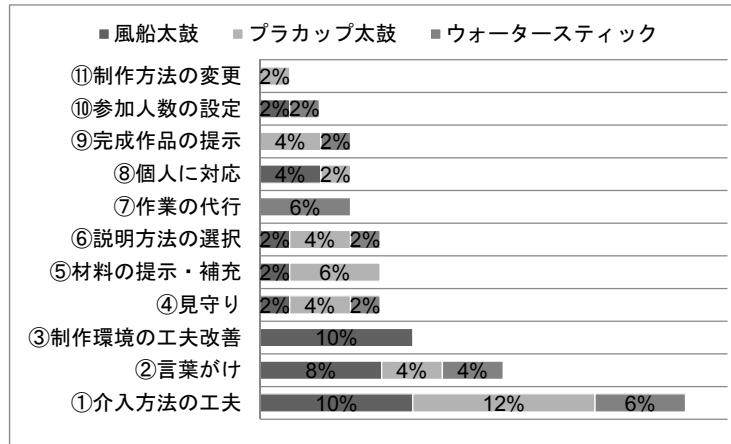


図4 制作過程での援助内容 (回答比率) (n=51)

風船太鼓制作の援助方法には、「①介入方法の工夫」「③制作環境の工夫・改善」「②言葉がけ」等が挙げられた。風船太鼓の工程は大きく5つに分けられるため、学生たちは実践計画の段階から工程別に担当を決めて準備を進めていた。それにより、作り方の説明や作業援助も比較的行き届き、個人の進度に対応したり、自ずと子どもたち同士で理解させ合ったりする環境を作ることができたとしている。各工程では、学生たちは子どもたちの作業状況と心理状態を読み取り、「②言葉がけ」を通して評価・提案などを行い、「自身・意欲を持たせる」「安心して活動に参加させる」「自主性を発揮させる」ように対応している。特に風船太鼓は風船を缶にかぶせるという作業が音質を決める上で最も重要なが、風船を引っ張るときに手指の強い力や大人の支えが必要となる。そのような場面に際し、学生は、子どもが作業するときは力を込めるときの一助になるような掛け声や応援の言葉をかけることにより、「意欲を持たせる」「作業のコツをつかませる」ように工夫している。学生が代わりに作業を行う場合も完全に代行せず、「子どもの作業を補助する」「学生の作業を子どもに補助させる」「子どもと学生で共同作業する」という立場を取り、何らかの形で子どもが作業に関わっている状態を作り出している。あくまでも子ども主体の活動であり、「発達に応じた作業をさせる」「達成感・自信を持たせる」「共同作業

の楽しさを感じさせる」ことができるよう 「①介入方法の工夫」を図っていることがわかる。

プラカップ太鼓制作の援助方法には、「①介入方法の工夫」「⑤材料の提示・補充」を筆頭に「②言葉がけ」「④見守り」「⑥説明方法の選択」が同率で挙がっている。当初の予定ではプラカップ太鼓はマレット作りと太鼓作りの2工程があったが、作業場所をあまり広くとれないことや参加人数を考慮して予定を変更、学生がマレットの基礎部分を作り、その飾り付けと太鼓作りを子どもたちに行わせていた。カップや割り箸をテープで巻くというだけの単純な作業であるが、どの色や模様のテープで巻くのかによって作業の楽しさや楽器への愛着度が変わってくる。学生はこのテープ選びも楽器作りの大変な工程の一部であると考え、「②言葉がけ」や「⑤材料の提示」を通して、子どもたちが自分の気に入ったテープを選べるような働きかけを重点的に行っている。テープを巻く作業では、その動作を子どもたちに見せ、真似させることにより作り方を伝え、年長児以上の子どもたちはその後の作業を自主的に進めることへと効果を得たが、子どもによってはカップの凹凸部分へテープを貼る作業が意外に難しいということを事前に予測できておらず、ふさわしい対応が即座にとれなかった学生もいたことがうかがえる。テープを切る場面では、まだはさみを使うことができない子どもたちに対して意欲づけ、作業の簡易化、補助などを行い、子どもの意欲や達成感を削がないような「①介入方法を工夫」している。

ウォータースティックの制作は、先述の通り工程に大人の援助が必要な箇所がいくつかあった。特に楽器の本体は水が漏れないように確実に作らなければならず、前半の「1.缶に水を入れる」「2.接着剤で付ける」「3.ガムテープで固定する」の作業は、これまでの2楽器に見られたような「①介入方法の工夫」のみでは成し遂げられず、学生や大人が「⑦作業を代行」するほかない難しさがあったことがわかる。援助方法についても「⑦作業の代行」に関する記述が複数見られ、幼児～小学校低学年の子どもたちを対象とした活動内容・工程としては適していなかった可能性がある。そのような状況に際し学生は、本体制作を主に自分たちや保護者が行うようにし、子どもには完成した本体を不織布で巻いたり飾りを付けたりする作業に関わらせる、という対応を図った。その際に1名の学生が大人に任せる理由を子どもたちに伝え、制作への意欲を損なわないように留意していたこともわかった。大人が作業を進める姿をうれしそうに見守っていた子どももいたということである。また飾り付けの作業では、子どもたちが動作を楽しく進められるように比喩表現を用いながら動作のイメージを伝えたり、指先の発達に応じて援助したりすることで、「理解を促す」「達成感・自信を持たせる」「意欲・集中力を促す」ための工夫が図られている。

表4－1 風船太鼓の工程における参加者への援助方法

工程	対応例	意図	記述例
作り方を説明する	③制作環境（工夫）	親子の理解を促す	絵を描く、風船を張る、絵を側面に巻き付ける所など、制作過程に合わせてコーナーを作ることで、親子にわかりやすく説明ができたと思う。
	⑧個人への対応	子どもの理解を促す	作り方をわかりやすく、今からその子が何をしたらよいかも伝えて一緒に作業した。
	⑩参加人数の設定	子どもの理解を促す	【反省】参加者が予想よりも多く、作り方を丁寧に説明できなかった。
1.用紙に描くシールを貼る	②言葉がけ（評価）	自信・意欲を持たせる	絵を描いている子どもに「○○だね上手だね」と声をかけ関わりを持つ。
	②言葉がけ（提案）	活動の楽しさを感じさせる	何を描こうか迷っていそうな子どもにシールなどを持ってきて、「どれか貼る？」と声をかけ、活動に参加できるようにする。
	⑤材料の提示・補充	（自己選択の楽しさ）	机が足りずに床で描いている子どもにはペンやシール等を渡して、どの子も楽しめるように動く。

2. 米を入れる			記述なし
②言葉掛け（応援） ①介入方法の工夫（補助する）	意欲を持たせる作業のコツをつかませる	「よいしょ」などの掛け声や「がんばれ～、ひっぱれ～」と応援するなど、子どもがすぐに反応できるような声かけを意識した。	
3. 風船を張る ①介入方法の工夫（共同作業） ①介入方法の工夫（補助させる）	発達に応じた作業をさせる達成感・自信を持たせる活動の楽しさを感じさせる（共同作業の楽しさ）	子どもが風船をかぶせるときに、缶を押さえながら一緒に作業して、子どもが「できた！」という気持ちを味わえるようにした。 「一緒に引っ張って手伝ってね」と声をかけ、一緒に作業を行う。 子どもに風船を引っ張ってもらい（学生も一緒に引っ張る）、かぶせるところは主に学生が行った。 風船をかぶせるのが難しく、ほぼ私たちがしていたが、子どもには手を添えてもらい、ガムテープで巻いてもらうことで、子どもも一緒に作っている思うことができたのではないかと思う。	
4. 用紙を巻く	②言葉掛け（提案）	活動の楽しさを感じさせる（装飾の楽しさ） 自主性を發揮させる	「どんな感じで用紙貼る？」「こっちが上で大丈夫かな？」「好きな色を選んでみて」など、作業の状況に合わせながら言葉掛けを行った。
5. 最後の仕上げ ①介入方法の工夫（補助する） ④見守り	達成感・自信を持たせる 自主性を發揮させる	マスキングテープを貼る際は、私が缶を回し、子どもがマスキングテープを持って貼っていました。 マスキングテープの色や張る位置などは子どもたちで決めて、それぞれ好きなように仕上げができていたので良かった。	
その他 ②言葉掛け（会話） ⑧個人への対応 ③制作環境（工夫） ③制作環境（改善）	意欲を持たせる 安心して活動に参加させる 意欲・集中力を持続させる 安心して活動に参加する	援助だけでなく子どもとの会話を楽しむ等、活動を楽しいと感じ取れる雰囲気づくりも行った。 子どもの数を把握し、作業が止まってしまうような子どもがいないように、一人一人把握しながら言葉掛けをした。 各場所で作業を終えると次の作業場所に案内して連携するようにした。 【反省】作る場所を3つに分けたが、場所がばらばらだったので、円で順番に行けるようにし、しっかりと声かけする必要があったと感じた。	



写真1 風船太鼓の制作場面
(左から 1. 用紙に描く 2. 米を入れる 3. 風船を張る (学生・子・親) 4. 用紙を側面に貼る)

表4-2 プラカップ太鼓の工程における参加者への援助方法

工程	対応例	意図	記述例
作り方を説明する	⑨完成作品の提示 ⑥説明方法の選択	子どもに理解を促す	最初にテープの巻き方を見本に見せると、子どもも真似してくれた。 初めにすべてを説明せず、一緒に作りながらゆっくりとわかりやすく説明できた。
1. テープを選ぶ	②言葉掛け（提案） ⑤材料の提示・補充	活動の楽しさを感じさせる（自己選択・装飾の楽しさ）	「自分が貼りたいテープを選んでね」「どんな色が好き？」など子どもが使いたいテープができるだけ多く使えるように声をかけた。
2. テープを巻く	②言葉掛け（応援） ②言葉掛け（助言）	意欲を持たせる 作業のコツをつかませる	テープを巻く作業も一緒にを行い、「きれいに巻けてるよ！あと少し！」と声をかけたりした。 【反省】ヤクルトの容器は凹凸があり、テープを貼るのが子ども達には難しく、「うまく貼れない」という子どもにうまく貼れるようなアドバイスはできなかった。
3. テープを切る	②言葉掛け（提案） ①介入方法の工夫（作業簡易化） ①介入方法の工夫（補助する） ①介入方法の工夫（補助する）	意欲・自信を持たせる 発達に応じた作業をさせる達成感・自信を持たせる活動の楽しさを感じさせる（技術・道具を使う楽しさ）	「はさみ使える？使ってみる？」と聞いて自分でやってみるように勧めた。 手で切れるものは「手で切ってもいいよ」と声をかけ、簡単にできるようにした。 はさみを使えない子どもにはテープを適度な長さに切り、渡すことで、貼る作業を楽しめるようにした。 はさみが使えるがテープがぐちゃぐちゃになってしまう子どもには、テープを持つことで自分がテープを切ったと思えるようにした。
4. マレット制作	⑪制作方法の変更	発達に応じた作業をさせる	割りばしにビーズを付けるのは難しそうだったので、予めつけておき、子どもたちにテープを巻いてもらうだけにした。
その他	④見守り	発達に応じた作業をさせる達成感・自信を持たせる 自主性を發揮させる	年齢の低い子どもには一対一でずっと付きつきりで作業を進めていたが、年長さんや小学生ぐらいになると全部自分たちで作業を進めていたのであまり援助ができなかった。 一つのマスキングテープでプラカップも棒も制作する子どももいれば、貼りたいと思った様々なマスキングテープを貼っていた子どももいた。



写真2 プラカップ太鼓の制作場面
(左から 1. テープを選ぶ 2. テープを巻く 3. テープをはさみで切る 4. マレット制作)

表4-3 ウォータースティックの工程における参加者への援助方法

工程	対応例	意図	記述例
作り方の説明	⑨完成作品の提示	理解を促す	説明は完成形を見せてこんな音がするんだよと子どもたちに声かけした。それを見て子どもたちは自分でウォータースティックを持って横に揺らしたり、音を聞いたりしていた。
	⑥説明方法の選択	理解を促す	【反省】子どもに説明するには言葉が難しいところがあり、工夫がいると思った。
	⑩参加人数の設定	理解を促す	【反省】参加者が予想していたよりも多く、作り方を丁寧に説明することができなかった。
1. 缶Aに水を入れる	⑦作業の代行	発達に応じた作業をさせる 安全配慮を行う	参加者の年齢が全体的に低く、子どもは難しく学生が行った。
2. 缶Bに接着剤で付ける	②言葉がけ（説明） 作業の代行	発達に応じた作業をさせる 安全配慮を行う	なぜ瞬間に接着剤を触ったらいけないかをきちんと伝え、大人に任せる場面への納得へと繋げていけた。
3. テープ固定	⑦作業の代行		参加者の年齢が全体的に低く、子どもは難しく学生が行った。
4. 不織布を巻く	②言葉がけ（説明）	理解を促す	「キャンディみたいに」と子どもにもわかりやすいような言葉を使った。
	⑦作業の代行	達成感・自信を持たせる	【反省】まっすぐ布を巻くことができない子どもはほとんど保護者が作っていたので残念に思った。
5. 輪ゴムで両端をしばる	⑦作業の代行	達成感・自信を持たせる	【反省】輪ゴムを縛ることができない子どもはほとんど保護者が作っていたので残念に思った。
6. 模様付け			記述なし
その他	④見守り	達成感・自信を持たせる	なるべく自分で制作できるようにやり方を伝えて見守るようにした。
	①介入方法の工夫 (共同作業)	意欲・集中力を持続させる	指先をうまく動かすことが難しい子どもには一緒にしてあげて、あきらめてしまわないように援助した。
	②言葉がけ（会話）	意欲・集中力を持続させる	子どもが飽きずに集中できるように会話をはさみながら作業を進めた。

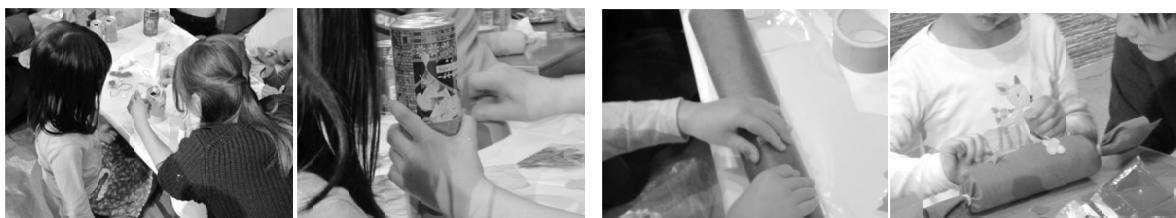


写真3 ウォータースティックの制作場面
(左から 2. 接着剤で付ける 3. ガムテープで固定 4. 不織布で巻く 6. 模様をつける)

(3) 手作り楽器を用いた音遊びや合奏活動の進行は効果的にできたか

制作後は皆で片づけを行い、子どもたちに中央に集まらせて演奏活動を開始した。活動の構成は、楽器ごとに「音遊び」と「子どもの歌に合わせた合奏」を学生がリードし、子どもたちがそれに応じる一斉活動を行い、最後に子どもたちのそれぞれ好きな楽器で、歌に合わせて自由に演奏する活動を行うというものであった。この活動の進行についての評価は図5に示すように、全体では肯定的評価（とてできた・できた）が11名（61%）、否定的評価（あまりできなかつた）が7名（39%）であり、前節（1）（2）の結果と比べると否定的評価をした学生がやや多くなった。とくにプラカップ太鼓は「とて

もできた～あまりできなかった」の3段階にわたって評価が点在している。

両評価の理由や状況に関する記述を読み取り、趣旨をキーワードごとに分類すると、図6のとおり各楽器の音遊びと合奏活動に効果的な方法として8の対応例を確認することができた。表5（1～3）は対応方法ごとに抽出された意図と記述例（反省事項も含む）を示したものである。

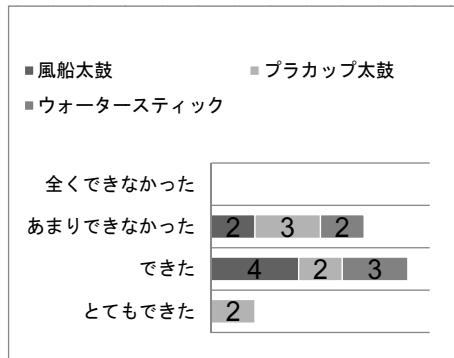


図5 演奏活動の自己評価の回答
(回答人数) (n=17)

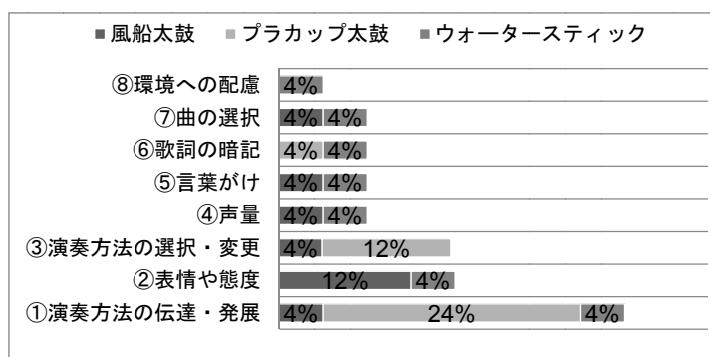


図6 演奏活動の進行に効果的な方法 (回答比率) (n=24)

演奏活動は、3つの楽器の中で最も音の鳴らしやすい風船太鼓から始めた。音遊びの活動では、「たたく・つまむ・振る」などいろいろな奏法で実際に音を鳴らし、自分たちの作った楽器がそれぞれどのような音が出せるのかを聴いてみた。続いて歌に合わせた合奏活動では、「大きな太鼓」の歌に合わせて「たたく・つまむ」奏法で音の強弱を表現し、「アイアイ」の歌に合わせて「振る」奏法で腕を上下左右に動かす動作も楽しむ活動へと展開した。制作後初めての合奏活動であり、子どもたちは学生たちの指示や模範演奏に興味を示し、動作を真似ながら音を鳴らして楽しむ様子が見られた。また中にはカップ太鼓のマレットを使って風船太鼓をたたこうとする子どもも見られた。活動を効果的に進行するための方法として、学生の記述からは「②表情や態度」を筆頭に「①演奏方法の伝達・発展」「③演奏方法の選択・変更」「④声量」「⑤言葉かけ（話し方）」「⑦曲の選択」の6項目が挙げられ、それらを通して子どもたちが「安心して活動に参加する」「合奏方法を理解する」「活動の楽しさを感じる」「感性を引き出す」「一体感を共有する」ことができるよう意図し、留意しながら進めていったことがわかる。

次に行ったウォータースティックの活動では、最初に、耳を澄まして音を聞く体験として「だれが一番早く鳴り止むか」「だれが最後まで鳴らすことができるか」を聴き比べる活動を予定していたが、会場の人数が多く、静寂した環境を作るのは難しかったので、この活動を断念することになった。活動を始めるにあたって、進行役の学生が子どもたちの中に分け入り「どんな音がするかな」と問いかけると「波の音」「海の音」などの答えが返ってきて、進行役の学生も「すごいね、波の音、海の音だって」と子どもたちに応答したことで、場の緊張感が少し解かれた様子であった。歌に合わせた活動では「あめふりくまのこ」と「しゃぼんだま」の歌をピアノ伴奏に合わせて歌いながら、ウォータースティックの音を鳴らし、耳を澄ませて音を聴いた。学生の記述からは、活動を効果的に進行するための方法として「①演奏方法の伝達・発展」「②表情や態度」「④声量」「⑤言葉かけ（発問）」「⑥歌詞の暗記」「⑦曲の選択」「⑧環境への配慮」の7項目が挙げられ、子どもたちが「安心して活動に参加する」「感性を引き出す」「感じ方を共有する」「活動の楽しさを感じる」ことができるよう、そして「活動の楽しさを増

させる」ことができるように意図し、留意しながら進めていったことがわかる。

プラカップ太鼓は上下を逆にして持ち、マレットで底を叩いて音を鳴らすが、利き手でないほうの手で飲み口の幅（空気の通り道）を調節すると音高が作れる仕組みとなっている。ただし音高はそれぞれの手のふさぎ方によって相対的に作っていくことになり、全員での合奏となるとなかなか音程を合わせるのが難しい。学生たちが事前に試した結果5～6度までの音程が作れたので、その範囲内のメロディを持つ歌として「きらきら星」「メリーさんのひつじ」を演奏曲として用意していたが、当日参加してくれた子どもたちの年齢を配慮し、最終的にプラカップ太鼓は旋律楽器としてではなくリズム楽器として扱い、合奏活動を進めていくことにした。音遊びの活動「リズムまねっこ」では、学生の叩くりズムを子どもたちが真似る遊びを行い、1回目は譜例1のようなリズムで、2回目は譜例2に示すようなリズムで活動を行った。学生一人終わるごとに仕切り直して活動を進めていたが、仕切り直さず連続的に進めていくと子どもたちも拍子に乗りやすく楽しさがより増したと思われる。また2回目のリズムは難しくなると予告していたのにも関わらず、3人目までは1回目とほぼ同等であったが、4人目以降によくやくシンコペーションのリズムや8拍のリズムへと発展し、子どもたちも一生懸命真似をしようと意欲的になる様子が見られた。歌に合わせた演奏活動では旋律のリズムに合わせて楽器をたたくのみでしたが、音程による演奏に向けて説明方法や実践方法を工夫できたのではないかと記述する学生もあり、以上のことから、プラカップ太鼓の音遊びと合奏の進行に効果的な方法については、「活動の楽しさを増させる」「子どもたちの意欲を引き出す」ための「①演奏方法の伝達・発展」が課題となった。また、プラカップ太鼓においては、全員での演奏活動の場面のみならず、それ以前の制作過程で学生が個人的に子どもたちと音遊びを行った場面での気づきも記述されていた。制作過程では、子どもたちができるばかりのプラカップ太鼓を自由に鳴らして演奏方法を探求する姿や、学生の見本を真似て歌に合わせてリズムを楽しむ姿も見られたことから、演奏方法の伝達・発展の一方法として、自由な時間の中で子どもが自分なりに楽器を探求できるように見守ったり、音楽的な楽しさへと少しづつ先導したりすることも、演奏活動を進行する上で効果的であることがわかる。

表5－1 風船太鼓を用いた演奏活動の進行に効果的な方法について

場面	方法	意図	記述例
合奏	⑤言葉かけ（話し方）	子どもの理解を促す	なるべく子どものわかりやすい言葉遣いでゆっくりと話すようにした。
	⑧演奏方法の伝達・展開	子どもの理解を促す	歌詞に合わせて鳴らし方にも変化をつけ、それが見えやすいように工夫した。
	⑧演奏方法の選択・変更	子どもの感性を引き出す	プラカップ太鼓のばちを使って風船太鼓を本物の太鼓に見立てて遊ぶ姿があった。
	②表情や態度	活動の楽しさを感じさせる	子どもと視線を合わせて体を揺らしながら一緒に演奏を楽しんだ。
	安心して活動に参加させる		【反省】見本演奏で戸惑っててしまう場面があったので、もう少し事前に打ち合わせをしておくべきであった。
	④声量	活動の楽しさを感じさせる	マイクがなくても大きな声で歌い、雰囲気作りを積極的に行なった。
	⑦曲の選択	活動の楽しさを感じさせる	興味を持ってじっと見つめている子どもの様子も見られたので、様々な曲で合奏をしてよかったです。

表5－2 ウォータースティックを用いた演奏活動の進行に効果的な方法について

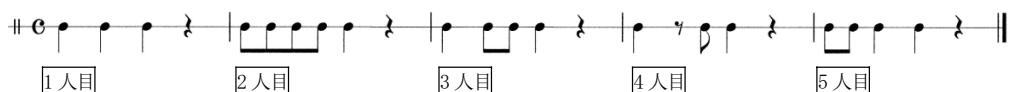
場面	方法	意図	記述例
音遊び	⑤言葉かけ（発問）	子どもの感性を引き出す 感じ方を共有する	どんな音がする？と子どもたちに問いかけると、「波の音」「海の音」など様々な感じ方が聞けてうれしかった。
	④声量		
	⑨環境への配慮	活動の楽しさを感じさせる	ウォータースティックは他の楽器より音が小さいので、楽器としての面白さが薄れていたように思う。マイク等を使っても良いと思った。

合奏	②表情や態度	安心して活動に参加できる活動の楽しさを感じさせる	【反省】もう少し楽しそうに立って、楽しそうに演奏できていたらよかったです。
	①演奏方法の伝達・展開	活動の楽しさを増させる	【反省】鳴らし方が同じ動き（ゆっくり傾ける）ばかりだったので、ときどき激しく振ってもいいと思った。
	⑥歌詞の暗記	安心して活動に参加できる	【反省】前で見本を見せるのに、歌詞を忘れてしまった。
	⑦曲の選択	活動の楽しさを感じさせる	子どもになじみのある歌で楽器を鳴らすことで、楽しそうに合奏をしていた。

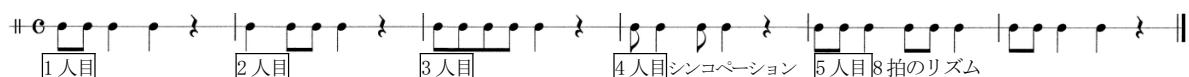
表5-3 プラカップ太鼓を用いた演奏活動の進行に効果的な方法について

場面	方法	意図	記述例
場面	①演奏方法の伝達・展開	子どもの感性を引き出す活動の楽しさを感じさせる	容器の後ろを叩いたり、横を叩いたりなど様々な叩き方と一緒に探しながら楽しむことができた。
		子どもの理解を促す活動の楽しさを感じさせる	子どももと一対一でキラキラ星を歌いながら一緒にプラカップ太鼓をたたくと、音程は作らなくても歌のリズムに合わせて楽しそうにたたく姿が見られた。
	①演奏方法の伝達・展開	子どもに理解を促す	【反省】ヤクルト太鼓の音の仕組みを子どもに理解してもらうことはすごく難しかった。完成した子に対してじっくり鳴らし方を教える時間もなかつたので、あまり伝えることができなかつた。
制作	①演奏方法の伝達・展開	子どもに理解を促す	リズムを真似する活動では、一回目にもう少し簡単なリズムから始めるべきだった。
		活動の楽しさを増させる	様々な年齢の子どもがいたのでもっと難易度に幅を持たせるとより楽しんでもらえた。
	①演奏方法の伝達・展開	意欲を持たせる	リズムを真似るとき、もう少しレパートリーを増やしたほうが良い。
音遊び	③演奏方法の選択・変更	子どもに理解を促す 子どもの感性を引き出す活動の楽しさを感じさせる	【反省】音階を演奏するのは難しそうだったのでメロディに合わせ叩くだけにしたが、音階はバラバラになってしまったので、もう少し簡単に鳴らせる方法と一緒に考えてやってみてもよかつた。
	⑥歌詞の暗記	安心して活動に参加できる	【反省】歌詞に迷いがあり、その迷いが子ども達にも伝わってしまったと思う。

譜例1 リズムまねっこ（1回目）



譜例2 リズムまねっこ（2回目）



3つの楽器の演奏活動が終了した時点でまだ時間が余っていたので、最後に「おもちゃのチャチャチャ」の歌とピアノ伴奏に合わせて自由に楽器を鳴らして楽しむ活動を即興的に行った。子どもたちは「チャチャチャ」の部分のリズムに合わせて、自分たちの制作した楽器を気持ち良さそうに鳴らしていた。その姿から「曲に合わせて自由に音を鳴らす」「立って体を動かしながら演奏する」活動は子どもたちの心身を解放し、音を皆で鳴らすことの楽しさをより実感できるものとして効果的であることがわかった。



写真4 演奏活動の様子
(左から、活動進行の学生の様子、子どもたちの様子(風船太鼓、ウォータースティック、プラカップ太鼓))

5. 考察と今後の課題

本稿では、平成27年度に実施した保育者養成課程学生対象の授業実践「児童館における子どもや親子を対象とした手作り楽器制作と演奏活動の企画と実践」の取り組みについて、学生の学びや授業の成果を把握するための質問紙調査から、学生の実践の振り返りをもとに結果考察を行った。興味づけから演奏活動までの進行順序に従い、学生の自己評価とその理由や状況に関する記述を読み取った結果、楽器により多少の差は見られるものの次のことが明らかとなった。自己評価では興味付け、制作援助は概ね効果的に行えたが、演奏活動進行では効果的に行えた学生と行えなかつた学生に分かれた。自己評価の記述では、興味付け、制作援助、演奏活動進行の各場面で学生は状況を読み取り、意図を持って必要な対応を子どもたちに図っていることがわかった。どの場面においても基本的に「活動の楽しさを感じさせる」「安心して活動に参加させる」ことを意図した対応が行われており、1日限りのイベントではあったが、可能な限り活動の趣旨に近づけるように配慮しながら対応を図っていたことがわかる。また制作援助の場面においては、「(作り方の)理解を促す」「発達に応じた作業をさせる」「意欲・自信・達成感を持たせる」との意図による対応が特に見られ、子どもの心情や育ちを読み取り、知識や技能に配慮しながら、共感的な態度で個に応じた援助が行えるように努めていたことがわかった。このことは保育を実践する際に必要な行動的側面の力量にも通ずる部分があるだろう。今後は、同取り組みにおける質問紙調査から「手作り楽器の再検証」「幼児教育・保育・子育て支援への展開」に焦点を当てて結果分析を行い、保育者養成課程における本授業実践の意義と課題について継続して考察を行うこととする。

[参考文献]

- ・山本敦子（2016）「保育者養成校における手作り楽器の授業実践に関する研究動向からの一考察」『高田短期大学育児文化研究第11号』高田短期大学育児文化研究センター：53-64
- ・上村晶（2016）「保育現場が求める保育実践力の形成段階—保育者への移行プロセスに期待する保育の専門性とは—」『高田短期大学育児文化研究第11号』高田短期大学育児文化研究センター：11-20